
魔法少女リリカルなのは タイトル未定 『憑依？ T S チート物』

にーと

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは タイトル未定 「憑依？」 TS チート物』

【Zコード】

Z 8 6 7 2 M

【作者名】

にーと

【あらすじ】

いつの間にか一面真っ白な世界にいた俺。あれ? それきまで教室にいたのに……。

続きを読むしたらあらすじは更新します。

ぱるるーぐ まだ、幸せだった頃（前書き）

えと、まあ、頑張ります。

ふるわーぐ まだ、幸せだった頃

(……後一分……)

少女は薄闇の中、ベッドの上で身体を丸めてじっと時が過ぎるのが待っていた。以前夜中に出歩いた時に怒られてしまったからだ。少女自身としては怒られたことより帰ってきた時の姉の泣きそうな顔が辛かったのだが…。それからは夜のお出かけは我慢して寝れない夜をベッドの上でじつとしている。…たまに姉といっしょに寝るがその時は寝れなくても寂しいことはない。

(5…4…3…2…1…0…)

待ちに待った午前六時になり布団を投げ飛ばすよつこはなぎ取つた、花柄のカーテンをさつと開けて窓を全開にする。ベッドから降りると箪笥に近づき、今日着る服をわざと選ぶ。

パジャマの上着を脱いだとこりで、窓から入ってきた新鮮な空気に肌をなでられ肌寒いと感じる。十一月の朝の空気を無視してテキパキと着替えると最後に髪を頭の後ろで束ねてから姿見の前で一度自分の姿を確認する。

肩下まで伸びた金色の髪に緑の瞳、整った顔立ちが、まだ幼いながらも落ち着いた印象を与えていた。

彼女は姿見から視線を外して机の上のペンダントを手に取り声を掛ける。

「おはよう。アルト」

おはよ「ひ」やこます。マスター

人の言葉を解するペンダントを首にかけ、鼻歌を歌いながら部屋を後にする。廊下を出て、たつたつたつと爽快なリズムで階段を降りると。階段の側面に作られた収納スペースから掃除機やモップなどの掃除道具を取り出す。子供の身体には大きすぎて使いにくいがこの身体はそれもあまり苦にしない。

掃除機はコンセントを使わずに身体から眼には見えないバスを繋ぎ思考のソースも分け渡す、バスから電流を流してスイッチを入れると電源が入り、掃除機が動き出す。そのまま掃除機はフラフラと独りでに家中のゴミを吸つて回る、モップも同様だ。

掃除を我が先鋭達がやつてくれているうちに（実際は彼女が動かしているのだが）朝食を作つてしまおうとリビングの扉に手を掛けた時に一階の扉が開く音がして足を止める。階段を見ると寝起きの女性がフラフラと階段を下りてくる。

「姉さんおはよ～
おはよ「ひ」やこます。

「おはよ～、二人とも。今日も早いね～」

そんなこと無いよ。と少女は否定してからキッキンに向かつ。少女の背丈ではまだキッキンまで届かないでの宙に浮いて作業をするのだが、普通まだ幼稚園に通つているような少女や食材、包丁、フライパンが台所を飛びまわつてるのは一般家庭では見られないだら。

「ほら、姉さん座つて座つて

洗面所から戻ってきた姉を椅子に座らせてからお皿をテーブルに運ぶ。既にキッチンには朝食のいい匂いが広まっていた。

「今日の朝食は『』飯に味噌汁、ほうれん草にじま和えに焼き魚です」

「ホントに優希は『』飯作るのが上手になつたね」

マスターは色々勉強してますからね。この前も料理の本を買っていましたよ

優希と呼ばれた少女はえへへと照れながらいただきますを言つ。早速一口口に入れたところで声がかかる。

「優希は今日はなのはちゃんと何をして遊ぶの?」

「ん、うまい（『』くん）、ん~なのはは気まぐれだからね。行つてみないと解らないかな」

「そつかーでもやつぱり、四歳の女の子の相手は楽しくない?」

「いや、そんなこと無いよ。結構見てて癒されるし」

「うんうん。そうだよねー」

「……どうしたの急にそんなこと聞いて?」

優希が眉をひそめて聞くと、彼女の姉は満面の笑みで答えた。

「いやー優希ちゃんは大人っぽいから、ちゃんと子供の友達が出来るか心配なんだよ、姉ちゃんは。恭也さんとも気が合つみたいだし」

「そんなこと無いよ、なのはは特別。』の前公園で、生意気なガキ……じゃない。お茶目な男の子がいたから叩き潰し……O・H・A・N A・S・I(なのは風)してあげたしね」

「そつかーよかつたよかつた。優希ちゃんにも男の子のともだちがいるんだねえ」

否定してるのは同年代のともだちなのだが。彼女は恭也のことだ
と思っているらしい。実際一年前までは男だったりもするのだから
気が合うのも当然である。

その後はとくに取り留めることもなく、ご飯を食べ終えたので。
一人は職場に出かけることになる（優希はただ付いていくだけだが）
。掃除道具をかたづけてから出かける準備をする。さつと厚手のコ
ート（子供用）を羽織つてから外に出て姉を待つていると隣の家の
庭から声を掛けられた。

「やあ、優希ちゃん。今日もお出かけかい」
「おはよっ」ぞこます、八神さん

そう、八神。はやての父親だ。今はまだ生きてるが、原作開始時
ではすでに死んでいる人である。助けようと思えば助けることも出
来るのだろうが、どうするかはまだ保留にしている。はやての父親
と一三話しているうちに姉さんがやつてきて話を切り上げる。向か
う先は翠屋。姉さんは桃子さんの弟子？　なのだ。

道すがら木枯らしが吹いて二人の間をすり抜ける。私は平氣だが
姉さんはそうではないので背筋を震わせることになる。私は姉さん
の周りの温度を操りながら姉さんの手をぎゅっと握った。それに
気づいた姉さんはこっちを抜いて笑顔を見せてくる。前の人生では
見ることの出来なかつた愛情の籠もつた笑顔だ。

「ありがと、優希ちゃん
「べ、べつに、大したことじゃない…」

姉さんはふふっと笑つてから、足を止め空を見上げてこう言った。
私も姉さんの顔を見上げる形になる。

「優希ちゃん」と会ってからもうそろそろ一年になるね

「そうだね……もつもんなにたつたんだ……」

確かに姉さんと初めて会ったのは――（月）（日）、クリスマスのこのだ、その頃からこの、他人から見たら便利な身体と付き合っていくことになる。

「わうだ、お祝いしよう！――ちようびクリスマスだし、優希ちゃん記念日だね。あれ？ 優希ちゃんは誕生日つていつだつけ？」

「誕生日……」

あの頃は、特に変哲もない普通の平日だったと思つが、優希としての自分はどうだらうか。初めてこの身体になつた日。

「私は、普通に生まれた訳じゃないから。強こて言つなりやつぱりクリスマスかなあ」

「あ～そっか。……じゃあ、クリスマスはお祝い事がいっぱいだね！ 私、ケーキ焼くよー。優希ちゃんのためにおつきにやつ期待して待つてね」

あ～、気を遣わせたな～と思ひながらも、姉の優しさに感謝する。

「ありがとう。でも、ホントに一年になるんだね……」

私がこの世界に来てから。と血の葉は胸に落ちて消えた。代わりに再び姉の手を取つて歩き出す。一年前。私がこの世界に来ることになった出来事を思い返しながら。

第零話　『魂が解け合ひの時』（前書き）

まあ、プロローグの続きみたいなものです。

第零話『魂が解け合つ時』

…………夢を、見ていた。

一人の少女の話だ。

俺は彼女の体の中で、彼女の目を通して世界を見ていた。

戦乱の時代だった。

彼女は、予言によって定められた王の世継ぎとしてこの世に生を受けた。

しかし王は嘆いた。

子は男子では無かつたからだ。

たとえ王になる宿命を持つていようと、男子でないものを跡継ぎにすることは出来ない。

彼女は王の家臣の老騎士に預けられ、一介に騎士の子供として育てられた。

素朴で懸命な老騎士の下、彼女はその跡取りとして成長していく
た。

老騎士は魔術師の予言を信じていたわけではない。

彼女に己が主君と同じものを感じたからこそ、騎士として育てなければならぬと信じ、その成長を願つたのだ。

だが、老騎士が願つまでもなく、彼女は誰よりも強くあらうと鍛錬の日々を重ねた。

崩壊し、死に行くだけの国を救えるのが王だけならば。

誰に言われるまでもなく、彼女はその為だけに剣を振るうと誓つていたのだ。

そうして、予言の日がやつてきた。

王を選び出すために、國中の領主と騎士が集まつた。

最も優れた者が王になるのならば、と誰もが馬上戦による選定を予想していた。

だが、選定の場に用意されていたのは皆に突き刺さつた抜き身の剣だけだった。

剣の柄には黄金の銘。

”この剣を岩から引いた者はプリテンの王たるべき物である”

その銘に従い、数多くの騎士が剣を掴んだ。

だが抜ける者はおりず、騎士たちは予め用意していた、馬上戦に

よる王の選定を始めてしまつた。

まだ騎士見習いだつた彼女には、馬上戦の資格などない。

彼女は人気の絶えた選定の岩に近づくと、躊躇つ事無く剣の柄に手を伸ばした。

「いやいや。それを手に取る前に、きちんと考えたほうがいい」

振り向くと、この国で最も恐れられていた魔術師がいた。

魔術師は語る。

それを手にしたが最後、お前は人間ではなくなるのだと。

その言葉に、彼女は頷くだけで返した。

王になるといつ事は、人でなくなるといつ事。

そんな覚悟は、生まれたときから抱いていた。

王とはつまり、みんなを守る為に、一番多くみんなを殺す存在なのだ。

幼い彼女は毎夜それを思い、朝になるまで震え続けた。

一日たりとも恐れなかつた日はない。

だがそれも、今日で終わりだと彼女は告げた。

剣は当然のように引き抜かれ、周囲は光に包まれた。

その瞬間、彼女は人でなくなつた。

王に性別など関係ない。

ただ王として機能さえすれば、王の風貌など誰も気に掛けず、一顧だにされまい。

仮に王が女性だと気が付く人間がいようと、王として優れているのなら問題になる筈がなかつた。

剣の魔力か、彼女の成長もそこで止まつた。

不気味と恐れる騎士も多かつたが、大半の騎士たちは主君の不死性を神秘と讃えあげた。

そうして。

後に伝説にまで称えられる、王の時代が始まつた。

新たな王の戦いは、まさに軍神の業だつた。

王は常に先陣に立つ。

彼女の行く手をふさげる敵など存在しなかつた。

戦いの神。

竜の化身とまで謳われたその身に、敗北などあり得ない。

十の年月、十一もの会戦を、彼女は勝利だけで終わらせた。

それはただ一心に、王として駆け抜けた日々だったのだろう。

一度も振り返らず、一度も汚れず。

彼女は王として育ち、その責務を全うしたのだ。

夢を見ていた……。否、これは夢ではなく記憶、この魂に刻まれた、私（俺）の記憶

空は薄墨に染まっていた。

黎明なのか、黄昏なのか。

広い空で、高い野原だった。

手を伸ばしても届かないに近い空と、手を伸ばせば掴めそうな雲。

そこは、かつて私（俺）が駆け抜けた戦場の一つだった。

今は従える騎兵もない。

見渡す限り黄金だつた草原もない。

鉛色に染まつた空の下、広がっているのは、とうに見慣れた、戦場後すぎなかつた。

感情が湧き立たない。

私（俺）にとって、こんな光景は日常だったのだろう。
独り残つた心には何もない。

黄金の剣に身を預けた私（俺）は、一度だけ大きく息を吐いて。
ゆっくりと肩の力を抜いた。

戦いが終わつたのだろう。

私（俺）は討ち滅ぼした兵士の骸を流し見た後、自陣へと足を運ぶ。

それが私（俺）の経験してきた戦いだつた。

冷静な態度は今とまつたく変わつていない。

私（俺）はどのような苦境であるひつじ、私（俺）だつた。

そして、王の夢を見る。

その剣を抜いた時から、私（俺）は人ではなくなつた。

父に代わつて領主となつた後、多くの騎士を従える王となつたからだ。

私（俺）はアーサー王ともアルトリアとも呼ばれ、騎士を目指していた私（俺）は、その人生を一変させた。

私（俺）は王の息子として振舞つた。

多くの領土を治め、騎士たちを統べる身は男ではなくてはならかつたからだ。

王が少女と知る物は、私（俺）の父親と魔術師しかいなかつた。

私（俺）は文字通り鉄で自身を覆い、生涯、その事実を封印した。

無論、不振に思つ者がいなかつたわけではない。

だが、聖剣を持つ騎士王は傷つかず、歳を取る事もない。

聖剣には妖精の守りがあり、持ち主を不老不死にする。

それ故、騎士としては小柄すぎる体を追求する者もいなく、少女としか思えない顔つきも、見田麗しい王として騎士たちの讃れとなつた。

事実、王は無敵だつた。

そこに体格や容姿など付け入る隙はない。

蛮族の侵攻に怯える民が求めたものは強い王であり、戦場を駆ける騎士が従うものは優れた統率者である。

王はその条件を全て備えていた。

故に

真実、王が何者であるかなど追求する者はいなか

つた。

女であるひと子供であるひとと関係はない。

ようは、それが『王』として国を守ればそれでよいのだ。

新しい王は公平無私であり、戦場では常に先陣に立つて敵を駆逐した。

多くの敵、多くの民が死んでいったが、王の選択は常に正しく、誰よりも上手く『王』をこなしていたのだ。

そこに疑う余地はないし、そもそも、王が正しいことは疑う意味もないだろ？

戦場では負け知らずだった。

失われていた騎馬形式を再構成した私（俺）の軍は、文字通り自由に戦場を駆け抜け、異民族の歩兵を破り、幾つもの城壁を突破した。

常に先陣に立っていたのは、その背に国があつたからなのか。

戦いに出たからには、全ての敵を切り捨てねばならなかつた。

戦いに出たからには、全ての敵を切り捨てねばならなかつた。

國を守る戦いの為にせ、血國の村を干上がらせて軍備を整えるのは常道だった。

そういう意味で、私（俺）ほど多くの人間を殺めた騎士はいかつただろう。

それを重いと、感じたことがあったのかは知らない。

こんな夢では知るよしもない話だ。

ただ、戦場を駆ける姿に迷いはなかつた。

玉座に身を預ける時も、憂いに眼を細めることさえない。

王とは人ではない。

人間の感情を持つていては、人間を守れない。

その誓いを、私（俺）は厳格に守り続けた。

あらゆる問題を解決し、誰もが舌を巻くほど政務に励んだ。

一寸の狂いもなく国を計り、寸分の過ちもなく人を罰した。

そうして、何度もかの戦いを勝利で収め、幾つもの部族を乱れなく統率し、何百という罪人を処罰したあと。

”アーサー王は、人の気持ちが分からぬ”と。

そう、側近の騎士が呟いた。

誰もがその不安を抱いていたのか。

王として完璧であればあるほど、彼らは自らの君主に疑問を抱いた。

人の感情がないものに、人を治められる筈がない。

何人かの名のある騎士は王城を離れるようになり、それすらも王は当然の出来事として受け入れ、統治の一部として組み込んだ。

見目麗しく、騎士たちの誉れであつた王は、そうして孤立していつた。

だが、それは王には関係のない些末事だ。

離れられ、恐れられ、裏切られようと、私（俺）の心は変わらない。

是非もない。

あの剣を手にすると決意した時から、私（俺）は感情など捨てたのだから。

そして、私（俺）にとつて最後の戦いが始まった。

バドンの丘での戦いは大勝で終わり、そのあまりに圧倒的な戦果から、蛮族たちは和睦を申し入れてきた。

もはや滅亡を待つだけだった国は、そうして束の間の平和を得た。

絶対的な英雄に頼る戦乱は終わった。

ブリテンはよつやく、私（俺）が夢見ていた国に戻つたつあったのだ。

戦乱の時代は続く。

王として定められた少女。

聖剣を抜き、その時から歳を取りらず、十一の大戦を勝ち抜いた偉大な騎士。

完璧であればあるほど敬遠され、長く続けば続くほど孤立するしかなかつた王。

それが、彼女の正体だ。

それでも彼女はよくやつた。

否、よくやつすぎた。

効率よく敵を殲し、戦の犠牲となる民は最小限に抑えた。

どのような戦であれ、それが戦いであるのなら犠牲はである。

ならば前もつて犠牲を払い軍備を整え、無駄なく敵を討つべきだと考へたのだ。

戦いの前に一つの村を枯れさせ、軍備を整え、異民族に領土が荒らさされる前にこれを討ち、十の村を守る。

それが王として彼女の出した結論であり、事実、当時においてそれは最善の政策だった。

だが騎士たちは不満だったのだらう。

彼らにとって死んでいいのは異民族だけであり、戦いになれば犠牲など出さずに勝利するのが常道だ。

戦いの前から己が領土を手放す必要などない。

自分達は勝利するのだから犠牲など出ない。

犠牲など出ないのだから、王の行為はただの徒労だと考えた。

もちろん、それは彼らの夢物語である。

こぞ戦いが始まれば、騎士たちは小さな村のことなど考えない。

それらは蹂躪されて当然のものであり、彼らが守るべき対象には入っていないのだから。

騎士たちは、敵に滅ぼされるのは当然だと言い、自分達では干上がりせるのは大罪だと言つ。

無論、そんな事は彼女にも分かつていた。

だが王にはそのような私情を挟めない。

彼女は私情を殺して決断を下し、彼らは私情を圧して従つ。

そうして犠牲を払い、連勝を続けていくうちに国は安定した。

その代償は王への反感だった。

”王は人の気持ちが分からぬ”と。

ある騎士はそう残し、王城から去つていった。

・・・・・おかしな話だ。

誰も人として望まなかつたといふのに、人としての感情がなれば反感を持つのだから。

かねてから王に不満を抱いていた騎士たちは、かの騎士が去つたことによつて、更に反感を強めていった。

あらゆる外敵と自国の問題を押し付け、彼女を追い詰めていったのだ。

破綻は見えていた。

度重なる問題が解決できなければ死。

全ての問題を解決したところで、その先にあるものも同じだろう。

だが、それは王には関係のない些末事だ。

離れられ、恐れられ、裏切られようと、彼女の心は変わらない。

……………それは、もととっくに決めていたからだろう。

あの剣を手にしようと決意したときから、彼女は自らの感情などを捨てたのだ。

もう何年も昔になつた光景。

岩に刺さつた剣。

それを前にして私（俺）は何を思ったのか。

気が付けば、後ろには見知らぬ魔術師が立つっていた。

「それを手に取る前に、きちんと考えたほうがいい」

手にすればあらゆる人間に恨まれ、惨たらしい死を迎えるとも言った。

恐れなかつた筈がない。

なにしろ、魔術師はちゃんと見せていたのだ。

その剣を取れば、私（俺）がどのような最後を迎えるのかということを。

「いいえ」

だが、それが私（俺）を決意させた。

自身の未来を見せられても力強く頷いた。

いいのかい、と魔術師は問いただす。

「多くの人が笑っていました。それはきっと間違いではないと思します」

剣に手をかける。

魔術師は困ったように顔を背け、

「奇跡には代償が必要だ。君は、その一番大切なものを引き換えるにするだろ？」「

その、予言じみた言葉を残した。

そう。

私（俺）はただ、みんなを守りたかった。

けれど、それを成し遂げるためには”人々を守りたい”という感情を捨てねばならなかつた。

・・・・・人の心を持つていては、王として国を守ることなど出来ぬのだから。

それを承知で剣を抜いた。

それを承知で、王として生きると誓つたのだ。

だから何度離れられ、恐れられ、裏切られようと、私（俺）の心は変わらない。

人としての心は捨てた。

幼い少女はそれを引き換えて、守ることを望んだのだから。

その気高い誓いを、誰が知る。

戦うと決めた。

何があるうと、たとえ、その先に、

それでも、戦うと決めたのだ。

避けえない、孤独の破滅が待つていても。

その終わりが、これだった。

カムランの戦い。

アーサー王が遠征に出立した後、一人の騎士が玉座を簒奪し、彼女の国は一つに分かれて殺しあった。

遠征に出た王の留守を狙い、国を乗っ取った若い騎士。

男の名はモードレッド。

騎士王の姉モルガンの息子であるその騎士は、その実、騎士王の息子だった。

結論から言えれば、女性であるアルトリアに子を作ることは出来ない。

だが、確かにモードレッドはアルトリアの血を受け継いではいたのだ。

アルトリアの姉であるモルガン　妹でありながら王となつたアルトリアを恨む彼女の妄念が、どのような手を尽くしたのか定かではない。

彼女の分身として作られたモードレッドは、父を明かせぬ騎士として王に仕え、その座を簒奪する日を待ち、ついに反旗を翻した。

後にカムランの戦いと呼ばれる、アーサー王最後の戦いである。

遠征先でモードレッドの裏切りを知ったアーサー王は、疲れきった兵を連れて国に戻り、自らの領土へと侵攻した。

かつて従えていた騎士を「ひとくじ」で斬り伏せ、自身が守っていた土地に攻め入った。

かろうじて自分に付き従つてくれた騎士たちも散つていき、最後に残つたのは、自身と、息子であるモードレッドだけだった。

両者の一騎打ちは、王の勝利で幕を下ろした。

・・・・・だが、無傷だつたという訳ではない。

強い呪いで括られたモードレッドは死してなお剣を振るい、王に、
もはや癒せない傷を残したからだ。

それがこの戦いの終わり。

騎士王と言われた彼女の、最後の姿だつた。

辛くなかつた筈はない。

思えば、彼女の戦いで辛くないものなどなかつた。

十一もの戦いはそのどれもが身を裂くような戦いであり、これは、
その最後に相應しい、もつとも大きな傷跡に他ならない。

領地に戻り、自國の軍を蹴散らし。

臣下であった騎士たちを皿らの手で処罰し、従つてくれた騎士たちを皆死なせ。

その果てに、カタチの上であれ、息子であつた騎士を倒さねばならなかつた。

かつて自身が従えていた騎士を「ヒ」とく斬り伏せ、自身が守つてきた土地に攻め入つた。

かるうじて自分に付き従つてくれた騎士たちも散り、自身の体も、

傷ついて動かなかった。

周囲には誰もいない。

今まで通り、何も変わらない。

胸にあるのは王としての誇りだけ。

私（俺）は、この結末を知っていた。

それでも得るものがあると信じたからこそ、ただ一点の汚れも出さず走り続けたのだ。

後悔などしていない。

無念があるとしたら、それはこの、荒れ果てた国の姿だけだった。

ふと視線を上げる。

この丘なら、遠く離れた城が見えるかもしれない。

だが、あるものは戦場の跡と深い森、そして、帰るべき湖が見えるだけだった。

やつ。

駆け抜けるだけだった丘は、もはや越えられぬ壁となっていたのだ。

肩の力が抜ける。

そうして、初めて自分の意思で、私（俺）は聖剣から指を離した。

それで終わった。

この夢が終わるのは当然だった。

私の記憶には、この先などないのだから。

・・・・・だから、これはもう変えられない一つの結末。

頑張つて頑張つて、恨まれて、裏切られて。

国よりも人を愛していたことも知られず、無慈悲な王としてあり
続け。

報われる事はなく、理解されることもなく。

孤立し、裏切られ続けた彼女が死を迎えるとしている、赤く染
まった剣の丘 。

第一話『田舎の壁』（前書き）

親にパソコンのコードを没収されたら泣いた。今は親のノーパソで更新中。

アルトリアの記憶にはFateの全ルート（バッドエンディング）も含めています。

第一話『目覚めの壁』

ん…………。

暗い、暗に闇の中、俺の意識は覚醒していく……。

「…………？」

田を開けようとするが指一本動かすことが出来ない。どうやら感覚は繋がっているようで、布が体を触れる感覚や車のヒンジ音、人々の喧騒が聞こえてくる。

それあの、記憶は……アルトリアの……？

ナウジヤ。

「わっ！」

なんじや、失礼な奴じやのわ。

どうゆうひとなんだ？ あれは記憶が流し込まれたって感じじやなかつたぞ？

あれは、お前の魂と騎士王の魂を融合させたのじや。

融合ひふゆうあわせたのじだよ？

そのままの意味じやよ。お前には儂の考えた設定でリリカルなのは世界で生きてもらつからい。

はあ？ 聞いてないぞ。

言つてないしな。

やうひ問題じやないよ……。はあ、もつこいからほかにやつて
無いじがあるなら教えてくれよ。

やうじやな、まずお前の体は儂が作った特別製じや。

……どんな？

いわゆる神の体じや！ もちろんお前の希望はすべて満たしてある（お前の想像以上にじやがな）。

はあ……、それで？

……あまり驚かんのじやな。神の体じやぞ、神の力じやぞ。地球を素手で割つたり、物質を想像したり、出来るんじやぞ。

やつ過ぎじやボケー！！

まあまあ落ち着け、ちゃんと最初は弱くしておいたから。あくまで鍛えたらの話じや、物質の想像もお前の力量次第じやからな。

それなら……あんまり、良くないなあ。

おつ、着いたようじやの続きをまた後じや。

何処に？ と、聞く前に。

ピンポンとインターホンの音が鳴り響いた。

第一話　『目覚めの時』（後書き）

ステータス表書いた方がいいかなあ？

第一話　『男言葉はいけませんー』（前書き）

前回のサブタイ別に田覚めてねーじやん。

第一話『男言葉はいけません!』

ピンポン

「はーい」ドタドタ

チャイムが鳴ると女人の声と足跡が聞こえてくる。いまだによく状況がつかめない。転生っていうのは赤ん坊から始まつたり、空から落とされたりするんじやないだろうか？
がちや、ドアの開く音、そして。

「あら?」

.....

「あら?」

玄関先に出てみると一台のトランクが置かれていた。あたりを見渡しても人の姿は見えない。

「落し物かしら?」

口に出してみるがなんとなくそういうではないと解る。これは私宛てだ。

「あら、どうしようかな

結局部屋まで運んでしまった。トランクを見ながら考えてみる。

「開けちゃつてもいいよね……」

家の前に置いてあつたものだし、中を見ないことにはどうすればいいか判断がつかないし開けちゃつても仕方ないよね、うん。

「あれ？」

開けようとした決意して（大げさ）トランクを見てみたのだが、鍵のようなものは付いておらず、トランクの側面に溝が一本入っているだけでどうやって開ければいいか検討もつかないのだ。

取り合えずこじ開けようとしたり、振ってみたり、両手で持つて落してみたりしたのだが、全く開く気配はなく、それどころか傷一つつかないので、そろそろあきらめようかなあ、とやけになってしまっていたのだろう、思わず言ってしまったのだ。

「開け～、コマ～。」

……何やってるんだろうと、一気に冷静になつて今までの行動を思い出し、恥ずかしくなつてしまつた。

いつの間にか日も沈んでしまつた。いくら冬は夜になるのが早くても六時間近くトランクと戯れていたことになる。

そもそも夕食の準備をしないとなーと立ち上がつた時、今まで何の反応も見せなかつたトランクから音が聞こえた。

ガチャ

「うづ～」

トランクがまるで跳ね飛ばされたかの様に開き中に入っていた物
が明らかになる。それは、真珠の様に白い肌で金色に光る髪に緑の
瞳を持った、まるで人形の様な女の子だった。

「気持ち悪っ！」

訂正、白いどろつか青い顔だった……。

第一話　『男言葉はいけません！』（後書き）

はあ、今回も短め。

第三話 「状況を把握する壁」（前書き）

サブタイがずれ過ぎてる……。

第三話『状況を把握する時』

「うう～、気持ち悪い……」

体を起して頭を振る。あの後女の人の可愛らしい声とともに揺れたり、突然の浮遊感と衝撃に襲われてすっかり平衡感覚が崩れてしまった。

吐き気に耐えながら状況を判断しようとあたりを見渡してみる。今、自分はトランクの様な物に座っているようだ。トランクの内側は真紅の布が敷き詰められていて人型にくぼんでいる、おそらく発泡スチロールの様なものが詰まっているのだろう。トランクから人が出てくるなんてどこかのローゼンだよ、と突っ込みたくなる。

さらに視線を巡らせる少し離れた所から女人の人_レがこっちを見ている、おそらくさつきからの声はこの人のものだろう。ここまで0・1秒、頭の回転速くなつたな～自分の事だけど。あれ？ この人、どこかで見た事あるような……。

「だ、大丈夫？」

「うう」

また吐き気が襲つてきた。不味い、もう駄目……。

「せ、洗面所…………うう」

「あわわ、大変大変～～」

「……すみませんでした」

「い、いいよ。全然問題なし…」

“私のせいなんだろうな～”

洗面所に連れて行つて貰つたのだが結局はかずにはぐく地獄のような苦しみを味わつた後。俺はリビングで女人と対面していた。

(なんか文字が見えるんだけど……。声も聞こえるし)
女人の頭の上あたりに文字が浮かびあがつてきて、それに合わせて女人の声が心の中に直接伝わつてくる。

“それは心の声じゃ”

(うわーー)

突然の声に思わず声に出そうになりそつなのを押しつぶめる。

「? どうかした?」 “驚いたよつて見えたけど?”

「な、なんでもないです」 (おこーー どうこういんどだよ)

“なに、言つたわつ神の体じゃと。人の考え方いろいろ読み取れるわい”

(考え? 心が読めるつてことかーー)

“ そうじや、そんなに驚かんでもよからつ”

(冗談じやない、プライバシーてもんがあるだろ普通)

“それは人間の話じゃ、おぬしはもう人間じゃあるまい”

（んな、むちゅくちゃな……人の心が読めたつて嬉しくねーぞ。止めたり出来ないのか？）

“そりや出来るワイ、見えるなと念じれば見えないし、聞こえるなと念じれば聞こえんわ”

（そうか、切りかれるんだな。見えるな　聞こえるな　）

“そうやつ、出来てあるぞ”

（お前からは遮断出来ね～のかよ。それと神の体つてのにはどんだけ隠し機能が付いてるんだよ）

“ふむ、それは見た方が早いじゃらうな。自分の体を見ながら解析アナライズ^{かいせき}と念じるのじや！”

（なんで英語なんだよ！　全く　解析　おおつ）

瞬間、視界の左上にうすい青色のウインドウが浮かび上がって頭に情報が流れ込んでくる。これは便利だ、なんで F a t e 風ステータスなのかは知らないが。

“しつしつ娘が反抗期になつた～”

（誰が娘だ、誰が！　……つてむすめえ！？）

あわててステータスを確認すると、そこには確かに女となつている。けれどやつぱり信じられなくて、いや信じたくないくて確認をも

う一度してみるとやはり変わらない。

「あ、あの鏡見せてもらつてもいいですか！」

「あ、うん、いいけど」

突然声を掛けられてしどろもどろになくなっているがそれを気にする隙はない。すぐさま洗面所まで行き、先ほど見られなかつた鏡を覗きこむ。そこには茫然とした顔で自分の頬を触る金髪緑眼の美女が居た、その顔だちは幼いながらも見たことのあるもので…。

どうやら今の俺はアルトリア（ただし幼女）にやつてつらじー、はまつ。

第三話 「状況を把握する時」（後書き）

中の声は聞こえます。念話とは違うから使い分けるかも。

第四話『初めて魔法を使つ時』

「えつと、改めて……。私は天使音姫あまつか おとひめ、19歳です。天使の音姫てんし おとひめつて書くんだよ」

「……おとめ?」

言われて氣づく、そうだ、どこかで見たことがあると思つたらう〇・C・C・の朝倉音姫にそっくりなんだ。でもどうして?.

説明しよう!-

うわっ! またかよ。しかもなんでヤツ○ーマン。

「ぬさいわい。あー、」ほん。説明しよう!- それは儂の趣味じやつ…趣味だからだ! まあ、顔と性格が同じなだけで〇・C・の設定は持ち込んでおらんがのつ

わざわざ言になおさんでも……。まあ、朝倉姉は俺も好きだが。天使つて名字もお前の仕業か。

「? どうかした」

音姫さん（ 実際目の前にするとどう呼べばいいか悩むよね）が不思議そうな顔で顔を覗きこんでくる。ひょっと氣が散つてたみたいだ。

「いえ、俺の名前は……」

前世? の名前を言いかけて、止める。今の俺はもう優人じゃな

い、ついかこの姿に似合わない。だからと黙つてアルトリアと召乗るのも違つ氣がする。

「大丈夫？」

「どこか具合でも悪そつにしてただろうか、心配そうな顔で音姫さんが見ている。なぜか口が勝手に動いていた、それがどんな内容か考える前に。

「いえ、大丈夫ですよ。それより名前、忘れちゃいました。良ければ付けてくれませんか？」

「ええっ！」

驚く音姫さん。いや俺も驚いてるけど。それよつさつきはなんで勝手に動いたのかなあ…？

ギックウ！

そこまであからさまに反応せんでも…もうお前の行動にも慣れて来たな。

「じゃあ優姫ちゃんつて呼んでも良いかな。優しい姫つて書くんだけど、なんだか頭に浮かんで來たから。えっと、もつと外国っぽい方がいいかな？ それともそれとも」

「いえ、優姫でいいですよ。それと、出来ればちゃんは止めてください

とても不安そうな音姫さんの言葉にかぶせて黙つ。奇しくも前世の名前に似ていたのは混沌の仕業だろつ、少し複雑な気分だ。

別に儂は何もしておらんだ。まあ、たまたまじやうづがな

え、そうなの。何かすっげー嬉しい。

……

白石紹介が済んだ所で音姫さんが会話を進める。

「それで、なんで優姫ちゃんはトランクから出てきたのかな

「それは…」

早速説明に詰まったところで右手に違和感を感じる。目線の高さまで持ち上げて軽く振つてみると違和感が無くなり手に中にパンフレットの様な冊子が現れた（わーびっくり）。パラパラと読んでみるがその内容について呆れてしまった。頭を押さえながらパンフを音姫さんに渡す。

曰く

- ・これは神が作った人形です。
- ・拾つたあなたはちょーラッキー、煮るなり焼くなり、食べるなり（性的な意味で）好きにしてください。
- ・魔法とか超能力が使えます。
- ・トランクに入つて居るものは有効に使ってね。
- ・これを読み終えたあなたの利き腕に令呪が刻まれます。令呪つていつのは命令すると逆らえなくなるんだよ

パンフを熟読していた音姫さんが令呪の確認をした後、顔をあげてこちらを見る。その視線に真剣な気配を感じて氣を引き締める。

「優姫ちゃん」

「な、なんでせうか」「

「嘘じや、ないんだね……」

「そうですね……」

「……」

「……」

「魔法つて？」

「え、ええと魔力をエネルギーに様々な現象を起すプログラムの事であります。サー」

「今使える?」

「ええと、簡単なので良ければ

「使ってみて」

「サー、イエス、マム」

ガクガクブルブル、そんなに低い声で話さないでほしい。とりあえず頭の中で術式を起動。ほんッと高性能だなこの体。口の中で音姫さんに聞こえないように呟く。失敗したら恥ずかしいし。

『フライヤーフィン』

素足に翡翠色の羽が生え体が宙に浮かび上がる。とりあえず一回まわって着地する。内心、初魔法にドキドキです、魔力光は縁なんだな。

「ええと、飛行魔法でした」

「凄い！　凄いよ優姫ちゃん」

「ありがとう」「ざいま、す？」

「他にもあるの、もつと見せて！」

「危険が無いのであれば……」

「まだ音姫さんのテンションについていけない。ああ、でも魔法楽しいなあ、あはは。」

.....結局その日の魔法行使は夜中まで続いた。

第四話　『初めて魔法を使つ時』（後書き）

優人のほつゝの意識が高めなのは性転換で困惑する様子を楽しもうとする混沌の策略です。決して作者の趣向じゃないんだからね！

第五話　『世界を創る時』（前書き）

そうか！　本文を書いてからサブタイをつけるんだ！

第五話『世界を創る時』

「う~ん」

音姫さんに魔法を見せていたのだが、いつの間にか音姫さんは眠つてしまっていた。取り合えず一階の部屋にあつたベッドに運んだもののこれからどうすれば良いか判らず途方に暮れていた。いつも寝てしまおうかと考え、リビングのソファーに体を横たえたのだが一向に眠くならない。

（やついえばトランクに色々入ってるって書いてあったな…）

体を起こし部屋に転がっているトランクに足を向ける。トランクに詰まつた緩衝材は背中を丸めた人型に窪んでいる。

（こうして見ると人形でも入つていたみたいだけど……）

入つていたのは俺なんだよな…とボヤキながら赤い布が敷かれた緩衝材を引つペがす。ビンゴ！トランクの底があるはずの場所にはもう一段赤い布で敷かれた緩衝材が詰まつていて、おそらく何か魔法が掛かっているのだろう。試しにもう一度緩衝材を剥がすと今度こそトランクの底が現れる、だいたい外から見る分の三倍ぐらいだろうか。

一段目の緩衝材に入つていた物は銀行の通帳にカード、暗証番号を書いた紙、保険証などの生活に必要なものと一つの鍵だった。銀行の通帳には9の数字が並んでいて何処の小学生だと呆れてしまつた。しかも保険証などの名前の欄はすでに天使 優姫となつていて再度あきれ_t（ｒｙ

最後に入つていた鍵だが金色で古い洋館に使うよつた装飾がされている、これにも魔法が掛かっているらしく神眼で見てみるとある空間へのゲートを開く物だと言つことが解つた。

鍵を胸の高さまで掲げるとこれまた古い洋館の様な扉が現れる。鍵を鍵穴に差し入れると“ガチャン”と鍵の开く音がお腹に響く。ぐくりと唾を飲み込み扉に手をかける。ゆっくりと開くと眩しい光に目がくらんで……と言つことはなく、普通に中の景色が広がつていた。

普通、言つてもビルが建つていたり山が見えたり草原が広がつているわけではなく一つの洋館が建つているだけの『精神と時の部屋』にそつくりな場所だ。扉を後ろ手に閉めると空氣に解けるように扉は消えていった。

「ここは何処なんだろ?」

洋館に近づきながら呟く、視界に大きな扉しか入らなくなるほど近づくと一人手に扉が開いて、中の様子が見える。そこにはまたもや白い空間の中にシンプルな机が一つあるだけだった。俺は机に近づいてその上に乗つっているメモを手に取る。

「なんだこれ?」

曰く、「この空間、いや「世界」はあのくそ爺が俺のため……俺に献上するために作ったものらしく俺が自由自在にコントロールできるらしい。やり方は簡単、“想像する”事だ。

想像するだけで家具、それを置く部屋、廊下に階段、一階やテラ

ス。大地や草木、山に空でさえも創る事が出来るらしい。

ただし、この世界で作られた物は外の世界には持ち出せない様になつてゐるらしい。

ちなみに混沌が言つていた神の力も同じように使つらしく、この世界は神の力の使い方を理解するためのチュートリアルも兼ねているようだ。

「ちょっとやってみるか」

目を瞑り、前の世界の相棒を頭に思い浮かべる。家にいる時は大抵触っていた唯一無一の存在……

「相棒おおおお！」

ふたたび目を開いた時、そこには黒く、スタイリッシュな……

ノートパソコンが。

「ふふ、少し暑くなつていたな……さて、早速俺のマル秘フォルダを

……

手早く近づき、流れのような動作で電源を入れる。しかし何回押しても相棒は沈黙を保っている。バッテリーに問題があるのかと思い、裏のカバーを外そうとすると……

「なん……だと……」

カバー 자체が無かつた。あわてて表も確認してみると少しづつ細部が違っている。ついていた物が無くなっているのだ、そこは俺が細かく想像していなかつた所で。

「まさか、ここまで再現してくれるなんてね……」

この様子だと中身の機械部分まで想像しないといけないだろう。俺はそこまで記憶していない、プログラムとかビーすんだって話だ。とりあえず機械はあるか植物もできないだろう、ん？ 植物の方が難しいのかな

「仕方ないな……」

取り合えずスプーンやフォークなどの日用品を作り出すことから始めよう、何事も一歩からだ。

……………パソコンは買いたいなおさないとなー、お金だけは有るけど……。あー俺のマル秘フォルダーが

第五話『世界を創る時』（後書き）

感想返信

皇焰さん うひうひ嘘ぢやうわー ちゃんと一割ぐらいは「ハーレム書く気がしなかった」って言つ理由があるんやから…だからその振り上げた鉈を下して…あああああ、ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ…。

て言うか主人公が出した条件だけでも十分すぎるチーとだよな…改稿するかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672m/>

魔法少女リリカルなのは タイトル未定 『憑依？ TS チート物』

2010年11月2日09時03分発行